

特別支援教育部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

「通常学級の個別の教育的配慮を要する児童生徒一人一人のニーズに応える教育的支援はどうあればよいか。」

2. 研究内容

【研究内容1】

○通常学級における学習に困難のある児童・生徒への支援

【研究内容2】

○通常学級における社会性の発達の遅れやコミュニケーションに障がいがあり、主に集団での生活場面に困難のある児童・生徒への支援

【研究内容3】

○通常学級における特別支援を要する児童生徒の校内支援体制や関係機関との連携の取り方

3. 研究方法

(1) 交流計画

・南北2ブロック制とし、それぞれに研究テーマに沿ったレポート交流を中心とした分科会を行う。後半は、講師を招いての講演会を行う。

(2) 分科会構成

北ブロック会場 石狩市立緑苑台小学校 3分科会

南ブロック会場 恵庭市立恵庭小学校 3分科会

第1分科会 「通常学級における学習に困難のある児童生徒への支援について」

第2分科会 「通常学級における社会性の発達の遅れやコミュニケーションに障がいがあり、主に集団での生活場面に困難のある児童・生徒の支援について」

第3分科会 「通常学級における特別支援を要する児童生徒の校内支援体制や関係機関との連携のとり方について」

(3) 講演会

北ブロック会場 講師 あいの里高等支援学校 教諭 高橋麻美先生
「高等支援学校への進学と卒業後の進路」

南ブロック会場 講師 白樺高等養護学校 教頭 星野健史先生
「白樺高等養護学校の教育」

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

5月 7日 (月) 課題部会合同役員研修会
第1回役員研修会

5月24日 (木) 第2回役員研修会

8月 9日(木) 第3回役員研修会・拡大役員会(南北ブロックごとの開催)

9月 4日(火) 石教研課題部会研究協議会

(2) 部会役員研修会での研究成果

昨年度からの反省を基に今年度は講演会を行うことになった。講演に関わってどのような内容でお話いただくかという講演の具体的な内容について協議を行った。講演を行う前の分科会の持ち方については、レポート交流が中心となるがその時間配分やグループ分けの方法などについての検討を行い、限られた時間内であるが、活発な議論が行われるように小グループに分けて話し合いを持つこととなった。

拡大役員会については、事例検討研修を行わないため、南北開催校において担当者が集まって研修会を持った。当日の動きや必要な物品、会場となる教室や体育館について確認した。また、当日の運営の仕方について、特に分科会運営を中心として司会進行の仕方やまとめの仕方などについて研修を行った。

例年とは違う運営の仕方になるために役員に戸惑いがあったものの、2年次目としてのまとめができるような分科会運営を意識し、計画の改善・修正を加えながら、当日に臨むことができるよう十分検討を重ねてきた。

2. 課題部会研究協議会での交流

(1) 課題部会研究協議会での交流内容

①実践・レポート交流の様子

<北ブロック>

第1分科会…運営委員 太田 亜弥(野幌若葉小)

「通常学級における、学習に困難のある児童・生徒への支援」を討議の柱として、7グループに分かれて、レポート発表を基に、実践交流を行った。

司会担当を中心に、交流の時間が足りないと感じた部会員もいるほど、活発な討議が行われた。交流の内容は以下のとおりである。

○1年生に年間3回行う平仮名調査によるつまずきを減らす学校全体の取り組み ○学習面・生活面で困難な児童に対する手立て ○グレーゾーンの児童への「うつしまる」の効果的な取り組み ○学習が困難な児童への家庭からの支援 ○支援の必要な児童に対する学級の児童の認識への配慮 ○校内での支援体制について ○ビジョントレーニングのよる書くことの向上 ○チェックリストの活用方法 ○学級担任の指導の一貫性のなさによる弊害 ○姿勢の悪い児童への体幹トレーニング ○アルファベットカード・元素記号カードの実践 ○つまずきの対処と合理的配慮について ○視線計測による読みの実態把握 ○i-padによる音読指導プログラムの利用 ○保護者との連携 ○北海道大学との連携による「読み」の指導

【まとめ】

学校全体で取り組んでいる特色ある取り組みや、北海道大学や眼鏡サロンルックなどの他機関と連携した取り組みが紹介されるなど、これまでの担任による「明日からでも役立つ身近な実践」の紹介から、さらに支援の方法が深まり、広がりが出てきている印象のある分科会となった。

短時間での交流ではあるが、「もっと情報を得たい、深く知りたい」という雰囲気でも進んだので、ぜひ、勤務校に戻られて、実践を広めてほしいと感じる。

(文責 太田亜弥)

第2分科会…運営委員 西田 幸子(野幌若葉小)

集団での生活場面に困難のある児童・生徒への支援についてのレポートをもとに、5グループに分かれて交流を行った。通常学級、支援学級、ことばの教室など様々な立場から、日々の悩みや実践報告があり、活発な話し合いが行われた。

- ・SST実践よりも、まず子どものニーズ(何に困っているか、どうなりたいか)の見極めが大切。
- ・自傷行為には、代替方法が有効というが、指導が難しい。
- ・板書が苦手な児童には、用意した問題文やワークシートを貼り付ける方法がある。徐々に支援を減らしていけばよ

い。本人が苦手さを理解していることが大事。

- ・コミュニケーションは、目に見えないから難しい。何が苦手か、どこでつまづいているかを明確にするとよい。
- ・中学校ではおとなしく、言いたいことが言えない子の不登校が増えている。周り、教師の受け入れや支援が不可欠。進学先の多様化で選択肢が広がった。小学校からの引き継ぎは、詳しく知りたい。
- ・緘黙で表現活動（歌、絵など）ができなかった子が、短歌で表現することに成功した。

その他にも、ADHDへの支援としてイライラの対処法を図式化（すごろくのように）して探っていく実践や、教材教具、書籍の紹介など、支援級の取り組みから通常級でも可能な支援方法についての紹介があり大変参考になった。

全体交流の発表で共通していたのは、「一人一人の実態やニーズを正確に把握する」「子どもを信じ、認める」ことが大切ということ。日々真摯に子どもと向き合っている先生方から、知恵と勇気をもらうことができた。

(文責 西田 幸子)

第3分科会…運営委員 岡本 光恵(文京台小)

北ブロック第3部会では、小グループでのレポート交流を行った。地域や学校種を越えたメンバーで、日々の実践での悩みや情報交流を行った。

小グループでは、各学校の校内の支援体制や、個々のケースの事例などのレポートを発表しあった。各学校で、コーディネーターを中心に、地域で様々な連携を作りながら、支援の実践を聞くことができた。また、コーディネーター業務の日々の実践上の悩みが多く出されて、解決に向けての方法を交流した。

- ・担任・コーディネーターの役割について…担任や支援員との日々の情報交流が大切。コーディネーターが担任と兼務の場合、授業の観察などすぐにできないこともある。担外のコーディネーターもいると助かっている。また、校内での特別支援教育関係の分掌を単独で設置している学校も増えてきている。運営にあたっては、支援業務をしつかり行える面がある反面、課題も出ていた。



- ・就学指導・進路指導…昨年同様、自閉情緒障がい児学級在籍児童の進路指導の難しさが話題に出た。様々な選択肢が広がっているが、進路に関わっている教員にとっては、さらに情報を知りたいとの意見が多数あがっていた。

- ・校内の支援体制について…コーディネーターとの業務内容について話題が出た。やはり複数配置が望ましいと、意見が出された。困り感の児童の内容も多岐にひろがってきている。不登校などの対応も増えてきており、他機関を含めた支援のチームを作り検討していくことの必要性が高まってきている。

本部会では、コーディネーターをされている部会員が多く、日々学校で、課題に感じていることや支援を行う上での悩みがたくさん出された。より効果的な支援を行う上でも、学校規模の大きさにかかわらず、コーディネーターを複数の配置をすることを希望する声がたくさん出た。

今回は、昨年度に比べると短い時間での交流であったので、もっと話をしたい部会員が多かったように感じた。日々多忙な業務をかかえながら、学校外とつながりを作り、情報交換をする場を作ることが難しくなっているため、今回の研修が有意義であったとの意見をいただいた。今回の研修の場だけでなく、日常においても情報交流していくきっかけになってほしいと考える。

(文責 岡本 光恵)

<南ブロック>

第1分科会…運営委員 小泉 しのぶ(大麻東小)

6グループに分かれてレポート交流、実践報告を中心にした話し合いが活発に行われた。グループ交流の概要は以下の通りである。

- ・黒板指示と口頭指示を一緒にすることを徹底することで、どの子にもわかりやすくなる。
- ・冰山モデルによる児童理解について
学級にいる気になる児童の行動（見える部分）とその背景（目に見えない部分）の関係を明らかにし、支援の方法を考える。
- ・ボンドで浮き出る字を作り、触覚でひらがなや漢字を書くことができるようになった。
- ・指示を出すときには、接続詞を冷たい印象を与えない程度に減らしたり、端的に言い切ったりするとよい。

- ・ひらがなの定着を図るため、絵の上に文字を置いて視覚的に覚えられるようにすると効果的だった。
- ・ほめることが自信と意欲につながる。
- ・体を動かすことで、落ち着き、体幹も育ってきた。

各学校での取り組みを交流したことで、新しい支援方法を知ることができた分科会であったように思う。大変充実した時間であった。

(文責 小泉 しのぶ)

第2分科会…運営委員 古山 順子(恵み野中)

第2分科会では、36名の参加者6つのグループに分かれ、全体で計22本のレポート交流が行われた。参加者それぞれが抱える課題は様々であり、互いの実践を交流することにより、日常の悩みを解決する糸口がつかめたりと、充実した時間を過ごすことができた様子であった。各グループの交流内容は、次の通りである。



- ・何に困っているのか、自分の気持ちを表現できない子どもへの対応・・・「アンガーマネジメント」「段階で表現」次はどうするのか、一緒に考える。(考えさせる。) 待つとあきらめること。安心できる環境の確保。親との関係。障がい特性を知るための検査を行う。

- ・小6の外国人(ネパール人) 転入生への対応・・・数教科は別室で個別対応を行っている。文教大生、校長、支援員、空きの先生、地域の方、図書館司書からの協力を得ながら支援を行った。保護者への支援も必要であった。

- ・独自のルールを作り出す児童への対応・・・高まった感情をクールダウンさせる為にゆっくり話を聞く。小さなことでも褒めるようにする。頑張ったらシールを渡してポイントを集めるようにする。

- ・子どもが否定的にならないような取り組みを。道徳の時間に同じような場面を設定し、振り返りを行うことも有効である。周囲の子たちを育てる。保育園の子供たちが助けてくれた例もある。担任からの、ほめほめグッズを渡す。折れ線グラフを活用し、その日の反省につなげるという方法もある。
 - ・学習に困難さはないが、生活場面に困難がある・・・予定変更苦手。気持ち切り替えが苦手。言葉では伝えることができず、時間をかけて気持ちを切り替える。
 - ・吃音のある子どもへの対応・・・友達との心のつながりで安心感を持たせる。
 - ・その子によって何がベストなのか、その子にあった指導方法を考えることが必要であり、学校全体でサポートできる体制作りが重要。校長や市教委を中心に大きな支援の輪を広げていくことが大切である。
 - ・少人数で活動することによって落ち着く場合が多い。落ち着く教室環境も大切である。気持ちが切り替わるまで待つこと、目的意識や見通しを持たせることも。
 - ・伝えたいことは端的に。板書の工夫などで、視覚的に捉えられるようにする。
 - ・指示はスモールステップで文字を残す。
 - ・保護者支援…否定するばかりでなく、学校への不信感を持たせないよう、信頼関係を作る。通信の工夫。教育相談。
 - ・担任だけで抱えない。連携が必要である。「自動交流会議」を開催し、全職員で支援の方向性を確認している。
- ★課題とされること…学校や学年との関わり、進度を合わせる。保護者への伝え方の難しさ。

担任とコーディネーターとの兼務は難しい。子どもに寄り添った教育が難しくなっている。

(文責 古山 順子)

第3分科会…運営委員 藤枝 理恵 教諭(柏小)

今年度は、講演会のため、1時間ほどの小中混ざって4~6人のグループでの交流となった。

A(小3中1)・970人の生徒に対して40人くらい支援が必要である。支援員の配置の工夫が必要である。

- ・中学校では進路を見据えて支援を考えている。

B(小3中2)・子ども支援委員会を設置しているが、関係者の日程調整が難しい。担任がコーディネーターだと難しい。

- ・ユニバーサルデザインを意識した教室環境、学習規律の統一をしている。

C(小2中2)・担外等の人手不足で学校体制が整わない。

- ・不登校は二次障害と思われる。早い段階での見極めや対応が大事である。

- D (小2中2)・支援員とは支援日誌を回覧し指導に役立てている。
 - ・スクールカウンセラーとの相談が機能している。
- E (小1中3)・支援員は英語、数学に入ってもらい配置にしている。
 - ・進路については、大通り、龍谷等色々な私立高校があるので実際に相談している。
- F (小2中2)・中学校に籍を置きながら札幌のフリースクールに通う生徒について
 - ・恵庭の通級指導教室の入級が増え続けている。
- G (小4中2)・支援計画は発達支援センターとの連携で考えるとよい。
 - ・第三者の外部から措置変え（特別支援学級）を言ってもらった方がよい。

以上、このような内容（一部）での交流だった。コーディネーターが多く所属している部会なので、「子どもの実態の見取る工夫」、「保護者との共通理解が取れた関係性」、「進路を見据えた対応」等の話が多かったように思われる。どのグループも日々の実践についての活発な話し合いがされていた。

(文責 藤枝 理恵)

(2) 講演会のまとめ

①北ブロック

「高等支援学校への進学と卒業後の進路」

～札幌あいの里高等支援学校の紹介と実践から～

講師 高橋 麻美 (札幌あいの里高等支援学校 教諭)

今日の学校現場では様々な教育的ニーズに応じた特別支援教育の充実が期待されている。中でも進路指導が大変重要である。子供たちの将来を考えるにあたって高等支援学校への進学と卒業後の進路について具体的な情報が欲しいとの部会員の声が多かったことから、今年度高等支援学校の現場の話しを伺うべく、北ブロックではあいの里高等支援学校の高橋麻美先生を招き、講演会を開催した。

はじめに知的障がい特別支援学校高等部の特色について基本的な説明があり、その後あいの里高等支援学校で行われている普通科と職業学科の取り組みについて紹介があった。地域の資源を活用した実習が組まれており、生徒たちが生き生きと取り組んでいる様子が動画で紹介された。学科ごとにカリキュラムが異なるものの、3年生では就職を前提とした現場実習を行うことになっている。そこで卒業後の進路希望先が決定される。

最後に、教育相談でよく寄せられる質問とその回答が紹介された。普通科では生徒の実態差がある中で、授業の方法を工夫している。各生徒の力に合わせたプリント学習や学ぶ内容に応じて学習集団を設定している。進路選択においては生徒が自己理解を深め、より積極的な選択を行うことが鍵であるとのことであった。

②南ブロック

「白樺高等養護学校の教育」

講師 星野 健史 (北海道白樺高等養護学校 教頭)

北ブロックでも述べたとおりの理由により、南ブロックでは白樺高等養護の星野健史教頭先生を招いて講演を行った。以下、講演内容の要約である。

白樺高等養護学校は、全国でも早い段階で開設され五十数年の歴史を持っている。

生徒数は155名で男女比は3：1である。

白樺の教育の根幹は「内面の成長の循環を目指す」である。具体的には『体験活動の充実』を図ることで「達成感・成就感・満足感」を味合わせるが、その際、挫折・葛藤・成功体験をすること、他と競うことはせず、自己の記録を伸ばすことに重点を置くことにより、自らの意識の変化に気づかせる。これが『理解力・自己理解の高まり』を図り、自分を変えたいという意識を芽生えさせ、それにより自己目標の意識を高め、目標達成に向け努力する自分を感じさせる。さらに体験活動の充実を図っていくという循環を作っていく。



授業内容は、体力づくりと作業学習を2本の柱としている。付随して総合的な学習の時間（進路の学習、全校活動）や生活単元学習、教科の学習を行っている。学科は現在7学科（生産技術科、木工科、工業科、家庭総合科、クリーニング科、園芸科（H31年度より募集停止）、窯業科）が設置されている。他の高等養護（支援）学校と違う点として、入学から学科を決めて学習するのではなく、1年生全員が紙工作業を、2年生になったら木工作業を学習するなど3年間で3つの作業種を学習するカリキュラムになっている。経験の拡充を図ることで自分の適性を知り、毎年違う作業を経験することで新しい環境になれるための力を付けること、自分の適性を理解することで進路に対する自己決定の選択肢を広げることにつながっている。体力づくりでは、5～10月はマラソン（2.5km）、11～4月はエアロビクスや筋力トレーニングを行っている。生徒は毎日の積み重ねが力になることを実感している。就職にあたって、労働週間（一週間すべてが作業学習、前後期）、職場実習（2年生2週間）、現場実習（3年生4週間）を行っている。毎年約3～4割の生徒が企業へ就職をしている。歴史やこれまでの実績があるため就職には強い学校である。

寄宿舎が設置されており、現在100名が入舎している。寄宿舎では「集団生活を通じて、基本的生活習慣をつける」「集団生活のルールを学び、社会参加する力を付ける」ことに力を入れている。

※最後に白樺高等養護学校が大切にしている4つの言葉を紹介していただき、講演を終えた。

- ・師弟同行…教師も子どもと同じ振る舞いをするのが教えることの基本である。
- ・率先垂範…自分が進んで手本を示す。模範を見せること。
- ・共汗協働…共に行動し、共に汗を流して働くこと。
- ・凡事徹底…当たり前のことを人には真似できないほど一生懸命やること。

Ⅲ. 部会研究の成果と課題

【研究内容1】 学習に困難のある児童生徒の支援

より具体的な支援の方法（教材教具の工夫や支援方法・声がけの工夫など）についてたくさんのレポートを基にした話し合いがなされた。支援学級の先生方も多かったが、通常学級で日々活用できるような実践などの報告が多く出されたのは、今年度の大きな成果と言える。

時間が短く、思うような実践交流までは十分にできなかったのが反省である。今年度のような日常に寄り添う実践報告を各学校に戻って広げていけるよう、部会の持ち方にも今後工夫が必要である。

【研究内容2】 主に集団での生活場面に困難のある児童生徒への支援

まずは、子どもの困り感に寄り添いながら児童理解を第一に考えること、その上で個々の実態に応じたSSTなどを活用することなど、日々の苦勞から出る悩みや解決方法の模索などが多く出された。通常学級だけではなく、支援学級の実践にも大きなヒントがあり、時間が足りなくなるほど深い交流ができた。より深い交流ができるよう、今後も運営側として進め方を工夫していかなければならない。

【研究内容3】 通常学級の特別支援を要する児童生徒の校内支援体制や関係機関との連携の取り方

コーディネーターが多く所属している分科会でもあり、対外的な機関との連携、人手不足による支援の苦勞など、日常の悩みが多く出された。昨年度はより具体的なテーマに絞り込んで話しをしていたが、今年は消化不良な感じが参加者の感想からも出されていた。その分課題解決の一端にでもなればと講演会を持ったところである。次年度は昨年度までの形を参考とし、より深い実践研修が行えるように努めたい。

【講演会】

リクエストの多かった、進路に関する内容ということと、南北にできるだけ差のないように考えながら講演会を企画した。参加者からは好評だったが、中には「特別支援学級に特化した内容では？」という意見も出された。しかし通常学級ではなかなか知ることのできない情報を提供することができたのは、大きな成果ではないかと考えている。

次年度は参加者同士の話し合いが十分にできるよう講演会を行わないが、継続を望む声は多い。250名を超える会員を一堂に会して行うのは難しいため、今後十分に検討していきたい。

（文責 工藤 正人）